

<図書紹介>

小山晴子著『マツ枯れを越えて—カシワとマツをめぐる旅』 118 頁

発行：小山重郎／発売：秋田文化出版、2008年11月、1200円+税(1,260円)

この本は『マツが枯れる』（2004年、1,000円）の続編にあたり、その後の研究のまとめとして、たいへん興味深く読ませていただきました。

自然科学研究と理科授業とが結びつき、地域の歴史を見つめるなかで海岸林の未来を見通したという大事な仕事が見えてきます。かつての勤務地付近の海岸林から更に広い地域でのカシワ林の成長や復活などを見て歩き・理解し、自らもそれに向けて活動する人々を増やしたいと学校教育への期待も大きかろうと思いますが、まずは一般書として作られています。

本書の構成はプロローグ／カシワ／カシワ模様のバンダナ／石狩湾のカシワ林／男鹿半島のカシワ／秋田のマツ枯れ／マツ枯れをどうする／森は生きている／エピローグ

最初の本、『マツが枯れる』では「松林をその地方の昔の自然植生に戻す」（p.75）という行政への期待がありました。この行政の作業がどのような推移をたどっているかという現状報告と自然植生の残存地探索の旅の話は、読者にとって本当に待ち遠しい読み物でした。この『マツ枯れを越えて』を手にして、わたしはこの本を待っていたのだ、という人が多かったと思います。

「カシワ模様のバンダナ」は、大胆にも北海道の十勝平野をカシワの国（p.28）と決めてのカシワ林と美術館訪問（カシワ模様のバンダナ）。ここで、実際に、北の大地がそういうところであったことがよくわかりました。

はじめはカシワの木の解説があります（カシワ、pp.11-16）。自然林ではブナ科の一種として知られており、その分布は「北東北、それも日本海側の海岸に多い」とあります。また、「南千島から日本全土、そして朝鮮、中国の東北部、稀には台湾にも自生」しているとされています。

「カシワは風障地、風が強くと寒く不毛の地に自生している」（p.17）。宮城県では「カシワの自然林は牡鹿半島の風障地にしかない」（p.17）という説明があります。この記述は印象的で、「かつては日本中にカシワの木があり、人々

には親しい存在だったのだろうか」(p.20)のところまでくると、こういう記述がありながら全国的に分布していたのではないかの疑問は淡く消えていくようです。以後、話題は最近の観察地(石狩湾の海岸林・・・)に限られていくのです。

それはともかく、坂本直行さんの「カシワ林」により「十勝平野のカシワ」林の描写になります。坂本さんはカシワの純林があったといいます。中札内美術村の9月の林は“純林”であり、林床には赤い実をつけたスズランがあった”。この他には、春、「林が茂る前に咲き揃うアズマイチゲ、ニリンソウ、そしてシロバナエンレイソウ・・・」と坂本さんの描写が紹介されていきます(p.36)。

北海道の丘陵地帯や山麓帯は、針広混交林で占められていると言われますが、たとえばそのモザイク的配置の妙は秋という季節は特に美しく感じさせるでしょうし、そういった中での純林の描写なども読ませてもらいたかったところです。

カシワ林のチョウに詳しい伊東拓也さんの登場で「石狩湾のカシワ林」、しかも天然林の紹介が展開します(pp.38-49)。カシワ、ハマナス、キンギンボク、コマユミ、ツタウルシ、ヤマブドウが見られミ、サロベツの方ではミズナラそしてトドマツ林へと移行している状況が分ってきます。

「男鹿半島のカシワ」では夫の重郎さんの仕事(沖縄県のウリミバエについて“不妊虫放飼法”による農薬を使わない根絶法の研究)が紹介され、カシワ仲間の佐藤晋一さんとのつながりが解明されていきます。そして入道崎灯台付近のカシワ林が紹介されます。この写真は1/2頁大のレイアウトにしてほしかったと思いました。ここでは北野天満宮の描写(pp.62-64)がよいと思いました。

つづいて小山さんは「秋田のマツ枯れ」「マツ枯れをどうする」として、ここでその原因解明と、海岸林の利用のされ方(混交林造成など)を克明に語っていきます。混交林の未来は「春にはまずシナノキが芽吹き、ヤブツバキの花が咲き、そしてカスミザクラの楚々とした淡色の花が樹冠を飾る。間に混じるクロマツも緑の下枝を十分伸ばし、頂きには毎年新芽を作るはずであ

る。波打ち際近くにはカシワが葉を伸ばし・・・」と描写されています。

土崎港という文字が出てきますが、小山さんは土崎中学校勤務時代というのがあったのでは、と思い出しながらかみ続けました。

ところで、わたしのささやかな楽しみは、今年残念な結果になりました。

『マツ枯れを越えて』のバルコニーに置かれた植木鉢のカシワ (p.85) はその後どうなったのでしょうか。マツ林を管理している秋田県森林技術センターの金子智紀さんが指摘された「苗の場合にもっとも大事な根」の扱いが出てきますが、わたしのカシワのドングリの場合、植え替えに遅れたため根は植木鉢の底の孔を通り抜けて地面に入り込んでいますから、植木鉢を壊して、成長を見えています。今回、この本を読んでからの測定ですけれども、カシワの根元の直径は7cm。高さは2.7mになりました。

今年がわたしが見守ってきたアカマツが枯れました。気付くのが遅れたのですが、少くも早くも救えなかったと諦めて、この11月22日に切り倒しました。直径約40cmの切り株の年輪は60近く数えられますが、我が家のこのマツは60年を越えています。戦後のわたしたちの生活を見てくれていた木で、カシワが育ってもわたしたちの心が癒えることはないでしょう。

東京都の武蔵野段丘に残る農家の肥料用・燃料用「雑木林」を切り開いて作られた太平洋戦争後の住宅団地の一部の宅地（小平市上水本町2丁目）でわたしは生活しています。わたしの家内は、1948年に引っ越してきており、あの枯れたマツは実生であると言っています。別の大きく育った3本の庭のマツは、50年程昔、製材業者に売却しています。

付近の雑木林のことですが、主としてコナラやクヌギの雑木林にアカマツがかなり多くみられましたが、アカマツは現在では極めて稀です。

わたしは、今年、観察は久しく絶えていたカミキリムシをわが家の庭で捕まえて、遊びにきていた孫に与えています。見上げて、マツの葉が変色していたかも知れないのを発見できていたら、線虫のことが脳裏に浮かび上がったかも知れません。なお、近所の稲荷神社のマツが1本枯れました。

『マツ枯れを越えて-カシワとマツをめぐる旅』は小山さん夫婦によるすてきな内容の本です。(鷹取 健)